

日本武尊の西征IV



小碓尊による熊襲征伐は福岡から上陸し、土蜘蛛などの戦いを経て、早崎、鹿児島島の熊襲を誅殺すことと治まったかのように思えます。しかし、別説があります。もともと熊襲とは福岡で一度戦っているのですがその時熊襲は西に逃げてしまったとする伝承です。その後熊襲を追いかけて九州北部を海路で廻り、有明海から佐賀県に入ると伝えています。小碓尊は川の地に熊襲がいることを知り、襲征伐の作戦を立てました。佐賀県にある地名にはその足跡が残っていました。

熊襲征伐は佐賀県

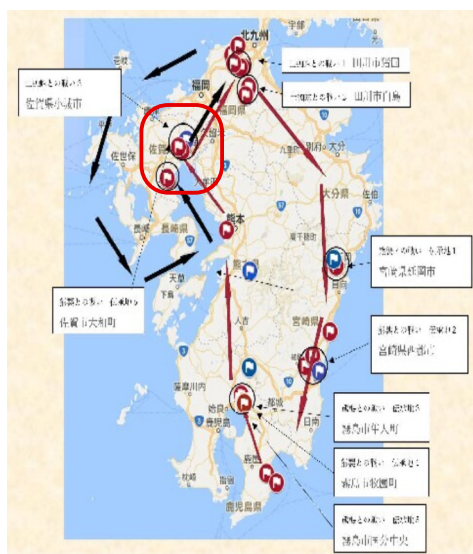


王子神社 佐賀県佐賀市本荘町

九州北部、小津河上現在の佐賀県佐賀市大和町に在っていた川上梟帥(熊襲建)が横暴なのを村人たちが朝廷に訴えましました。

小碓尊(日本武尊)の船は長門から海路で五島、平

戸を経由して有明海の肥の前の御崎(肥の御崎)に上陸、ここから土地の者に案内させて現在の佐賀市西与賀付近にやってきました。さらに、多布施川を廻り、中の龍造島というところに上陸しました。この島名は小碓尊が乗船していた船が舳に龍頭の彫り物を飾っていた龍造船だったことからついたようです。かつて中の龍造島には日本武尊を祀る王子権現がありました。上の龍造島や下の龍造島もあり、小津江には数個の島がありました。小碓尊は小津江の西(現在の妙見神社付近)と思われまます。(に仮殿を造りました。妙見神社の案



妙見神社 佐賀県佐賀市大和町

内には、「景行天皇の皇子小碓尊(日本武尊)が龍造島(鬼丸の宝琳院附近)に上陸後、寺小路妙見杜附近に仮殿をかまえ、これを本所と称

した。これが今日の本荘の名称の始まりであると伝えられている。」と書かれています。本荘はさらに本荘と変化しました。

龍造島 現在は埋め立てられてかつて島だったという痕跡はわかりませんが、佐賀城から南の宝琳院までにあった島が上の龍造島、本荘の大井樋付近にあった島が下の龍造島、その北に中の龍造島がありました。その島の間の碓島には碓観音がありました。現在は本荘町の瑞心寺に移設されています。

佐賀県『大和町史』

大和町にあった「真手村」という地名は小碓尊が熊襲建にとどめを刺そうとしたとき、熊襲建が「待て」と言っつてそれを止めたという言い伝えからついた地名と言われています。現在はこの地名は見当たりませんが、大和町にある健福寺は真手山という号で、また、真手川という名も地図から見つけることができました。『大和町史』には次のように書かれています。

第十二代景行天皇のころ、筑紫の国にはそこを根拠地にしていた熊襲という豪族がいて、九州全土を征服していました。熊襲は穴倉に陣を置いており、その威勢を恐れてだれも逆らいませんでした。これを聞いた天皇は皇子



健福寺 佐賀県佐賀市大和町大字川上

が正しい？、武内宿禰を補佐役として筑紫の穴倉を攻めました。この時熊襲たけるは西方の川上というところ

江神社地)を経由して

蛎久(佐賀市鍋島町蛎久)から上陸しました。小碓尊は熊襲(川上梟帥)が親族らとともに酒宴を開いていることを知り、剣を懐に隠し、女装して密かに宴席に紛れ込みました。夜になつて川上梟帥も酔つて寝ていたので、彼を刺さうとしたとき、川上梟帥は突然に起き上がり「待て、お前は何者だ」と叫びました。小碓尊は「我は天皇の子、日本童男だ」と答えると川上梟帥は「国中探しても我ほど強い者はいない。しかし、皇子の如き勇ましい者に出会つたことはない。願わくば、尊号を奉り、日本武尊と名乗つてはくれないか」と言いました。この後小碓尊は彼を刺殺し、その家来も討伐して熊襲を平定しました。

佐賀県小城市で土蜘蛛と戦い

奈良時代に編纂された『肥前国風土記』には、日本武尊と関連してつけられたとする地名について書かれています。

佐嘉郡は現在の佐賀県佐賀市一帯の地名でした。

日本武尊がこの地に巡行されたとき、楠が茂り榮えているのを見て「この国は榮の国」と言われたと伝わっています。はじめ「榮郡」

と書いていましたが、後にこれを改めて「佐嘉郡」とし、これをもとに現在の「佐賀」となりました。

小城市は現在の佐賀県小城市一帯の地名です。

昔、この地に天皇の命に従わない土蜘蛛がいて、堡・小城(城壁)を造つて隠れていました。これももともと小城郡という地名となりました。日本武尊が巡行されたときに土蜘蛛らは誅罰されました。

小城公園には茶筌塚古墳があります。公園の案内板によると、この古墳は小城公園内の標高三六メートルの独立丘陵頂部に築造された前方後円墳で、全長約五十メートル、後円部高約五メートルに対し、前方部の高さは約二メートルで高低差が三メートルあります。後円部が二段築成で後円部に比して前方部が低くなっています。墳丘上には朱塗りの鳥森稻荷神社が建つており、その脇にある神社名が書かれた石碑の位置が石室跡ではないかと思われまふ。前方部から土師器が出土しており四世紀後半の古墳時代前期の築造とされています。小城公園周辺は小高い丘となつており、小城の地名伝承となつていて、昔が築かれていたところなのかもしれませぬ。



茶筌塚古墳 佐賀県小城市

藤津郡は現在の佐賀県藤津郡一帯の地名です。昔、日本武尊が巡行されたとき、この地(海岸)に至つたと



太良嶽神社 佐賀県藤津郡太良町

した。「津」には港の意味があります。写真は有明海に面して日本武尊の上陸伝承がある太良嶽神社(佐賀県藤津郡太良町)です。

小碓尊(日本武尊)は佐賀で熊襲や土蜘蛛らと戦い、都に戻るため東に進みました。

吉備の穴済と難波の柏済

日本武尊の都への帰路は記紀により違つています。『日本書紀』は瀬戸内海を船で航行したように書かれています。『古事記』では征西の後鳥根県の出雲に向かっています。そして、鳥取に立ち寄り、日

つけることは容易ではありませんでした。そこで、やはり帰路は抵抗を続ける賊らを成敗しながら瀬戸内海を航行し、穴の済と柏済を経由して港に向かつたと推測しています。

穴済を岡山県児島付近に比定する説があります。『古事記』では「穴戸」と表記されており、山の神、河の神、穴戸の神と並べて表記していることから、それらがつながつた岡山県総社市の山(鬼城山)かも、高梁川、倉敷市の南にあつた吉備の穴海と呼ばれていた内海をそれぞれ指しているのではと言われます。児島半島はかつて「吉備児島」とよばれており、現在は陸続きですがかつては陸から穴海(内海)でつながつた島だったようです。また「穴戸」の名がつけられた神社が岡山県に二社あります。この神社の祭神は穴門武姫で、日本武尊の東征に従つた吉備武彦の娘です。

日本武尊は瀬戸内海をさらに東に航行していきましたが、やがて日が落ちて暗くなつてしまいました。そのため、航路を見失つたのです。神戸市の保久良神社前は「灘の一つ火」と昔から言われるよ



穴門山(あなとやま)神社 岡山県高梁市

本海側に沿つて東進し、兵庫県で南下して大阪に向かうというルートが想像できます。しかし、九州の伝承地とは異なり、神社や史跡な



保久良神社 兵庫県神戸市東灘区本山町

灯台の役目があつた。遭難しかけた日本武尊ですが、この灯りに陸に向かつて航行できたのかもしれない。